

授業を軸にあらゆる教育活動を改革し 本質を探究する主体的な学習者の育成へ

片山学園中学校・高校
(富山・私立)

大学進学を焦点とした指導から、社会を生きるための資質・能力育成の支援へ。
塾を母体として誕生した進学校が、授業をはじめとする教育活動全体を見直し、
すべての学びを生徒の将来につなげていけるよう、ダイナミックな学校改革を進めています。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

- 🔍 資質・能力育成の観点からの学校改革
- 🔍 全教員による授業改革
- 🔍 ルーブリック
- 🔍 総合的な探究の時間
- 🔍 課外講座
- 🔍 特別活動
- 🔍 体系的な進路指導

創立の原点に返り 「将来活躍できる力」育成にシフト

片山学園中学校・高校は2016年度より、高校卒業時点の進路実現から、社会を見据えた資質・能力の育成へと軸足を移す学校改革に取り組んでいる。授業、総合的な学習・探究の時間（以下「総合」）、特別講座「土曜塾」、進路学習における「4つの探究」を柱として、学びの自分ごと化を中心に据えた資質・能力を育成する、同校独自の教育の形が見えてきたところだ(図1)。

同校は4年前まで、まったく違うタイプの学校だった。大手学習塾を母体として05年に開校し、教員には系列塾の講師出身者が就いた。「孝・恩・徳」を校訓とし、塾とは一線を画す全人教育を掲げて創立された学校だが、新設校が地域で信頼されるためには大学合格実績も必要だ。週6日37時間の授業と週2回の夜間授業に加え、多くの補習を実施し、わかりやすい授業と受験指導によつて、1期生から東京大学や国立大学医学部など難関校の合格者を輩出。開校から10年が経つころには、進学校として一定の評価を獲得した。

一方で、生徒の学力の多層化が進み、すべての生徒を伸ばすにはどうしたらよいかという課題が顕著に。高校校長の松原肇先生は「授業中、楽しくなさそうな生徒の表情を見て、従来の教育の限界を感じた」と当時を振り返る。こうした状況の突破口を求め、松原校長をはじめ数人の教員が意見交換を行うようになった。「私た

ちはどんな生徒を育てたいのか?」「学校とはどんな場であるべきなのか?」…そのなかで明確になったのが、「ゴールは大学受験ではない。20年後、30年後の世界でリーダーとして活躍できる力の育成を大事にしていきたい」と、創立の理念に立ち返る必要性だった。

校訓を基盤とし、探究する姿勢や思考する力をもって主体的に学ぶ生徒の育成に真に取り組んでいこうと、15年11月、全教員で学校改革の柱を共有。そのなかで最優先事項にあがったのが、学校活動の中核である「授業」だ。その手段として、当時広がりつつあったAL(アクティブ・ラーニング)に着目し、この活用による授業の質的転換に向けて歩み始めた。一連の改革の推進役は、「将来につながる授業の学びもキャリア教育の一環」(高校教頭・進路指導部長 森内梨絵先生)との考えから、進路指導部が担うこととなった。

教科の学びの本質を見据え 進めてきた授業改革

数カ月間の準備期間を経て、16年度、中1〜高3の全教科でAL型授業に取り組み始めた。ただし、形だけアクティブになることには意味がない。生徒が自ら学ぶための環境設定の第1歩として、授業始めに本時の目標を提示し生徒と共有すること、最後に振り返り(リフレクションシート記入)を行って学んだことの内面化を図ることの2点のみ行えばよいと、導入のハードルを低く設定。あとは教科の特性やクラスの状況に応じて個々で工夫するものとした。



School Data

2005年開校／普通科
 生徒数292人(男子140人・女子152人)※高校のみ
 進路状況(2019年3月卒業生)大学73人・短大1人
 専門学校1人・その他31人
 富山県富山市東黒牧10
 TEL TEL076-483-8500
 URL <https://www.katayamagakuen.jp/>

Outline

北陸3県で展開する大手学習塾「富山育英センター」を母体とする学校法人片山学園が、「孝・恩・徳」を校訓とし、「全人教育」を掲げて2005年に中学校、08年に高校を開校した中高一貫校。高校1学年全員による英国研修を行うなど国際交流が活発。高い大学合格実績をあげるなか、16年度より授業を軸とした学校改革を推進中。同校敷地内に学生寮を設置して遠方の生徒のための環境整備を行っており、約100人が利用している。

「大切なのは生徒が主役になること。上手な講義で満足感を得るのは教員ですが、生徒が自ら考えてわかるという満足感を味わえるよう、先生方に『おいしいところを生徒に返そう』と呼びかけました」(森内教頭)

こうした1年目の実践から「主体的、対話的」の感覚は掴み始めたが、「深い学び」についてはなかなか答えが出ない。

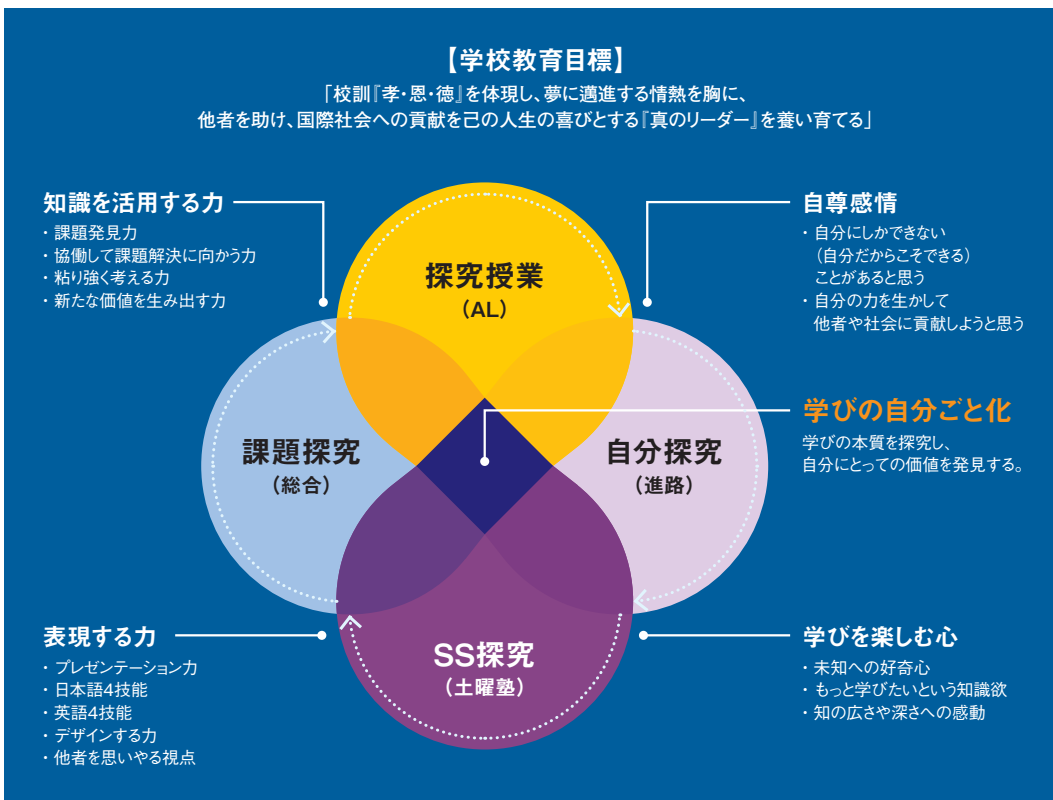
「各教科で身につけたいのは、テストで点数を取るといった表面的なものではなく、生徒の生涯にわたって血肉となつて生きる本質的な力です。それはどのような力なのか、教科ごとに考える必要があります」(森内教頭)

そこで、改革2年目となる17年度は、教員個々のAL型授業の拡充を図るとともに、教科の学びの本質について各教科部会で議論。年度末までに「片山学園の〇〇科が目指す深い学び」として明文化した。

翌18年度に検討したのは、その本質的な力を授業でどう効果的に育むか。良質な問い(課題)により生徒の思考が活発化するという体感から、「課題探究型授業」への挑戦を始めた。ブルーム・タキソミーをヒントとした課題のレベルの違いを踏まえ、知識だけではなく、創造的思考力が必要となる課題の作成に、初年度は中高1を対象に教科一丸で取り組んだ(図2)。その難易度は高く、暗礁に乗り上げた案がいくつもあつたという。

そして今年度、目指す課題について「自分と結びつく(当事者として考える)」「すぐには解決できず思考を促す内容・多様

図1 「4つの探究」で育む資質・能力



な解がある」「知識の意義・価値がわかる」と特徴つけて共有し、ICEモデルを活用してレベルの違いを整理。正解のない課題に対して協働して最適解を導く思考力を一層重視した、課題探究型授業を進めている。

「ペーパーテストでは測れない資質・能力を評価
 授業での学び方とともに、16年度より評価方法も変えた。
 定期考査には、従来からの知識・技能を

図3 主体性・多様性・協働性を測るルーブリック

ダウンロード可

	点数	最高レベル		発展レベル		標準レベル	
		まわりへの利益、次につながる 知の深化、真の理解がみられる	5	4	3	2	1
協働性 (A)	(ア)ペアやグループで互いに協力し合おうという姿勢が見られたか。 (イ)ペアやグループの活動が活発になるよう努力できたか。	目的を見据え、さらにグループ内での自身の役割や立場を考慮した上でなすべき仕事を果たし、それがグループの目的達成や向上につながった。	目的を見据え、互いに協力し合い、よりよい解を見つけた。	互いに協力し合っており、問題解決のための自身の役割を考へながら行動できた。	発言の順番を回したり深らさずに関与したりする。ペアが気持ちよく活動し、よく配慮した。	発言の順番を回したり深らさずに関与したりする。ペアが気持ちよく活動し、よく配慮した。	発言の順番を回したり深らさずに関与したりする。ペアが気持ちよく活動し、よく配慮した。
主体性 (B)	(ア)自分の考えを持って授業に参加し、それを他者に伝えられたか。 (イ)積極的に対話し、理解を深めることができたか。 (ウ)探究心を持って取り組むことができたか。 (エ)前向きに課題に取り組むことができたか。	自分の考えを持ち、異なる立場の相手にも配慮工夫しながら伝え、相手の理解も確かめることができた。 積極的に発言し、自らの発見や相手の思考の深化を導いた。 わからない事柄を自覚し、粘り強く取り組んで真の理解に至った。 与えられた課題を仕上げ、知識やスキルを定着させながら、能力を拡大しようとする追求した。	自分の考えを持ち、それを相手にわかるように工夫しながら伝えることができた。 積極的に会話し、考えを深めたり相手の糸口を掴んだりできた。 わからない事柄を自覚し、調べたり尋ねたりしながら理解できた。 与えられた課題を仕上げ、知識やスキルを定着し得た。	自分の考えを持ち、それを相手にわかるように工夫しながら伝えることができた。 積極的に会話し、考えを深めたり相手の糸口を掴んだりできた。 わからない事柄を調べたり尋ねたりしながら理解できた。 与えられた課題を仕上げ、知識やスキルを定着し得た。	自分の考えを持ち、それを相手にわかるように工夫しながら伝えることができた。 積極的に会話し、考えを深めたり相手の糸口を掴んだりできた。 わからない事柄を調べたり尋ねたりしながら理解できた。 与えられた課題を仕上げ、知識やスキルを定着し得た。	自分の考えを持ち、それを相手にわかるように工夫しながら伝えることができた。 積極的に会話し、考えを深めたり相手の糸口を掴んだりできた。 わからない事柄を調べたり尋ねたりしながら理解できた。 与えられた課題を仕上げ、知識やスキルを定着し得た。	自分の考えを持ち、それを相手にわかるように工夫しながら伝えることができた。 積極的に会話し、考えを深めたり相手の糸口を掴んだりできた。 わからない事柄を調べたり尋ねたりしながら理解できた。 与えられた課題を仕上げ、知識やスキルを定着し得た。
多様性 (C)	(ア)自分と異なる他者の意見を傾け、相互理解がはかれたか。 (イ)複数の異なる立場を踏まえ、建設的な対話をし、解決に至ることができたか。	相手と自分の意見・立場等の相違点を十分に理解し、それを踏まえて相互理解をはかり、自身を含めたメンバーが考えを深めたり広げたりできた。 相対立する視点や複数の立場を考慮した上で、それらを統合・進化させた発展的結論を見出せた。	相手の話を聞き、それを十分理解した上で自分の見解や立場を相手に伝え、互いの相違点を明らかにして相互理解ができた。 相対立する視点や複数の立場を考慮し、ひとつの結論へまとめあげることができた。	相手の話を聞き、それを十分理解した上で自分の見解や立場を相手に伝え、互いの相違点を明らかにして相互理解ができた。 相対立する視点や複数の立場を考慮し、ひとつの結論へまとめあげることができた。	相手の話を聞き、それを十分理解した上で自分の見解や立場を相手に伝え、互いの相違点を明らかにして相互理解ができた。 相対立する視点や複数の立場を考慮し、ひとつの結論へまとめあげることができた。	相手の話を聞き、それを十分理解した上で自分の見解や立場を相手に伝え、互いの相違点を明らかにして相互理解ができた。 相対立する視点や複数の立場を考慮し、ひとつの結論へまとめあげることができた。	相手の話を聞き、それを十分理解した上で自分の見解や立場を相手に伝え、互いの相違点を明らかにして相互理解ができた。 相対立する視点や複数の立場を考慮し、ひとつの結論へまとめあげることができた。

図2 2018年度に授業で扱った課題の例

国語総合	あらゆる分野において「グローバル化」が達成された世界は到来するか？ するとしたらその時世界はどうなっているか？ しないとするとその理由は？
数学	どのような図形の面積に1/6公式を用いることができるか
世界史A	第二次世界大戦とはどのような戦争だったのか
物理基礎	静止摩擦係数が大きい場合と小さい場合では、どちらのほうがより正確に測定しやすいか
英語表現	英単語・日本語の由来・成り立ち・語源について、英語を用いて発表し、議論を深めよう



18年度から課題探究型授業に取り組んでいる。例えば国語総合の「グローバル化とグローバリズム」の単元では、全10回のうちの後半半、グローバル化に関する問いについてグループで話し合い、クラス全体で考えを共有する授業を展開した。

この3年間の授業改革は、教員にとって簡単なことではない。A.L導入が打ち出された当初、数学科の齋藤 奈織子先生は「本当にできるのだろうか」と不安が大きかったという。そのような状態から出発し、最初に変わったのは生徒だった。A.L導入から数カ月で、教員から「生徒がぼーっとすることが格段に減った」「置いていかれる生徒が少なくなった」「生徒たちの『気づき』が増えている」といった声が出るようになった。

「最初に変化したのは、学習に前向きでなかった生徒たち。一つの正解を追う授業ではないので、臆することなく発言し、学ぶことを楽しむ姿が目立つようになりました。そんな生徒の様子を見て、教員もこの方向性で良いのだと勇気づけられたの

問う問題に加え、全体の2割程度を目安に思考力・判断力・表現力を問う問題を取り入れるようにした。

また、ペーパーテストでは測れない主体性・多様性・協働性を4段階で評価しようと、全学年全教科統のルーブリックを作成(図3)。学期に2回、これを用いた評価を行い、成績にも反映させている。18年度からは、生徒自身も、同様の基準で学期末に自己評価を行っている。

「本校が目指す学びの姿を生徒と共有し、生徒自身に、現在の自分と目標地点を把握させてメタ認知力を向上させることを目的としています」(森内教頭)

教員の在り方を変えた生徒の変容とチーム体制

では、どのように改革の背景には、同校教員のチームとしての動きも垣間見える。以前の同校にはあまりなかったことだが、教育改革スタート以降は教員研修や互見授業が活発に行われている。A.L導入準備期間には3カ月間で4回の研修により全員が同じスタートラインに立てるようになり、その後も実践と並行して年5回以上の研修を実施。授業改革の必要性についてのグループ討議や、教科を越えた授業見学と感想の共有による学び合いなどのほか、「どんな生徒を育てたいか」について教員一人ひとりが考える研修も行った(右下写真)。

また、教員個人でなく教科内で連携して改革に当たろうと、16年度以降、教科部会を頻繁に開催。さらに、教科主任には進路指導部のメンバーが就く体制にし、改革の狙いと内容が教科部会を通じて学校全体に浸透するようにした。学期ごと

各教員はさまざまな課題にぶつかりながらも、「1時間内に収めることが難しいが、一度失敗するといろいろ考えられる」「生徒の多様性を引き出すチャンス」などと前向きに捉え、前進してきた。そのなかで、教員の在り方にも変化がみられる。

「生徒が描く将来像はそれぞれで違い、教員が決めるものではありません。各自の将来像に自ら近づいていけるよう支援するのが私たちの仕事。その視点に立つて、指導する」といふより、生徒の成長をどう支援するかを大事にする教員が増えたと感じています」(森内教頭)

着実に進んできた改革の背景には、同校教員のチームとしての動きも垣間見える。以前の同校にはあまりなかったことだが、教育改革スタート以降は教員研修や互見授業が活発に行われている。A.L導入準備期間には3カ月間で4回の研修により全員が同じスタートラインに立てるようになり、その後も実践と並行して年5回以上の研修を実施。授業改革の必要性についてのグループ討議や、教科を越えた授業見学と感想の共有による学び合いなどのほか、「どんな生徒を育てたいか」について教員一人ひとりが考える研修も行った(右下写真)。

学校生活のあらゆる場面に育成する力の視点を導入

授業以外の面でもさまざまな改革が進行している。

「総合」については、新たに設置した探究部の主導により、1学年は共通テーマでグループ探究を行い、その経験を基に2・3学年で個人テーマを設定して探究活動に取り組むというプログラムを構築した。生徒が設定する個人テーマは、「江戸時代はなぜ約260年も続いたか」「なくそう空き家(守ろう)自分の地域」「火星への移住は可能か」など多様で、進路との関連性も

■教員研修「私たちはどんな生徒を育てたいか？」

17年3月に実施した教員研修では、「どんな生徒を育てたいか」をテーマにグループで言語化した。



特活主任
斎藤 奈織子先生



教頭・進路指導部長
森内 梨絵先生



校長
松原 肇先生

みられる。

「今後、こうした探究活動の経験の先に自分の進路を見いだしたり、それを軸に進学する生徒が増えていくでしょう。地域の大学や企業などと連携して総合の学びを「層充実させ、将来につなげていきたいと考えています」(松原校長)

同校の探究は、大学の研究とは違い、素晴らしい結果を出すことよりも、プロセスにおける生徒の成長を重視している。そのため、「文献調べ」「実験・観察」などのプロジェクト・教員チームを組んで支援し、各活動に必要な力を効果的に育成。また、国語の教員が物理系のテーマに取り組み生徒を担当するなど、あえて専門外のテーマを見ることが、多様な視点を取り入れて探究できるよう工夫している。

土曜日の使い方も変わった。かつては土曜日も通常授業を行っていたが、16年度より、希望者を対象とした特別講座「土曜塾」に切り替えた。内容の改善を重ね、今年度は教員が得意分野を活かして生徒の好奇心・探究心をかきたてるテーマにより、1講座5回連続の講座を設定。前期・後期で各8講座を実施する。開講に際し、各講座でどんな活動を行い、それによりどのような力を育むか、担当教員が生徒に向けてプレゼンを行って参加者を募っている。

委員会活動をはじめとする特別活動の在り方についても、今年度、全面的に見直しているところだ。

「『前年ごつしたから』ではなく、各委員会の生徒が、よりよい学校を作るためにど

「総合」では個人テーマに取り組み。KJ法などを使った個人作業や、教員への相談などを行いながら問いを深めていく。

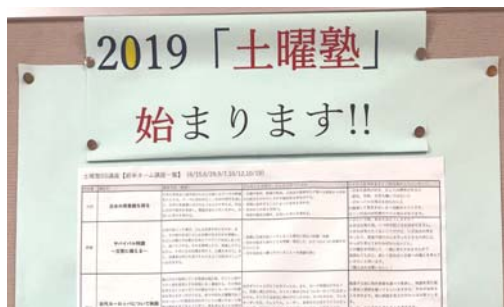


んな活動が必要かを話し合うところからスタート。その実現に向けた年間計画を立てて取り組んでいきます」(斎藤先生)

自分自身の価値基準で進路を切り拓いていけるように

かつて3学年担任の力量に頼っていた進路指導も、自己理解から始めて将来像を見通しながら希望進路に向かう3年間の流れを体系化し、大学受験の先を見据えた進路選択の支援に力を入れている。

「偏差値という他者が決めた基準だけでは



土曜塾の講座は、外部コンテストに参加する「企業の課題を解決する」、悩みの解決策を個人とグループで探る「実生活に哲学を役立てる」、美術品の国際比較をしながら参加者同士で意見交換する「日本の美意識を考る」など多彩。

自分を測るのではなく、自分の価値基準をもつて世界と向き合い、自身のフィールドを切り拓いてほしいです」(森内教頭)

さまざまな場面で資質・能力の育成を意識して取り組むなか、生徒に社会で生きていくための力が育っている手応えがあるという。

「私が特に感じるのは、考える楽しさを知り、対話ができる生徒が育っていること。考え、対話することを通して自分の内面が豊かになる実感があるのでしょう。卒業後も、さまざまな出会いのなかで自分

Interview

将来につながる自分の成長を実感

●中1の頃は先生の話や授業を聞いて、今取り組んでいる、友達と話し合う機会が多い授業の方が好きです。自分の頭の中のことを言葉で表現し、また友達の話や授業の内容が理解できるようになったと思います。答えは一つではなく、いろんな意見があることも学びました。みんなの話についていくのが大変なときもありますが、自分の意見をちゃんと言おうと努力しています。(2学年・石田爽乃さん/写真左)



●将来の目標はまだ決まっていますが、学校生活のなかで一つのテーマを探究していく面白さを知って、研究者や医者に興味が出てきました。日々の授業では、自分の考えをうまく人に伝えようとがんばっていて、こうした経験は、将来どんな方向に進んでもきっと役に立つと思っています。(2学年・瀬島慧也さん/写真中央)

●中学に入学したころ、私は医師になりたいと思っていました。でも、ダンス部の部長を務めたり、委員会活動に積極的に取り組んだりするなかで、リーダー的な立場でみんなを引っ張っていくことに面白さを感じるようになり、将来やりたいことも変わってきました。今の目標は、自分の理想とするホテルを作ること。そのために、「総合」の課題研究ではリーダーの在り方をテーマに研究中です。また、卒業後は大学で経営学を学びたいと考えています。(2学年・野崎春那さん/写真右)

自身の変化も楽しみながら、自ら学び、成長していきけるのではないのでしょうか」(森内教頭)

今後について、松原校長は、「4つの探究の学びを充実させることで、これまで以上に幅広い分野で卒業生がリーダーシップを発揮して活躍するのではないかと」期待を語る。ここ数年で、教育のゴールを、生徒の将来にわたる活躍へと大きくシフトさせてきた同校。ここからどんな生徒たちが育っていくのか、今後も注目していきたい。